
やくそく

来実

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
やくそく

【Nコード】
N3629I

【作者名】
来実

【あらすじ】
平和ですが、少しパラレルっぽいです。

プロローグ

「いややあ！アタシ平次と、はなれとうないよう…」

「…おれかて、いやや。せやけど…おれ和葉にまた会える自信、あ
んねん！」

「…ほんま？またいつしよ遊べるんかなあ…」

「ほんまや！おれが保障したるわ！」

「…うん！またいつしよに喧嘩しような平次！」

「おうっ！約束や！」

「約束やで！」

「「ゆーびきーりげーんまーんうーそつーいたらはーりせーんぼー
んのーますーゆーびきった！」」

1・夢

「…ん。…夢か」

時計を見るとまだ朝の4時。起きるには早過ぎる。

「ここんとこ、この夢ばっかやんけ…もう、何度目やねん」

平次は、はあ。とため息をついた。ここ一ヶ月程、ずっと同じ夢ばかり見ているのである。

そう。

和葉と離れ離れになった
あの日の夢を。

「せやけど。なんで今更こんな夢見るんやろ…？いつからやったっけ」

平次は、ちよつと考えてから、あ。と言った。

「あの女と別れてから…やな。」

そう。俺は、一ヶ月前、彼女がおった。もつとも、付き合つて一週間で別れてしもたけどな。あの女には、悪い事してしもたと思てる。適当な気持ちで受け入れて、すぐ突き放してしもたんやから。

告白してきたんは、隣のクラスの割と可愛いつて評判の女やった。部活が思つようにいなくてなげやりになつとつた俺は、うっかりOKしてしもたんや。

けど、OKしたんはそれだけじゃなくて、顔もあつたんかもしれん。

色白で、おっきな猫目。

最近気づいたんや。

この女、和葉に似とったんやって。

けど、いくらその女が和葉に似とっても、和葉とはちやうわけで。

口喧嘩なん、できるわけもなくて。俺の機嫌をとろうとしとるんが見え見えのこの女に、イライラして。

そして気づいた。

俺は、和葉やないと
ダメなんやってな…。

あの頃から多分、俺は和葉が好きやったんや。

せやけど。
今更気づいたって、和葉はもう俺の側におらへん。

やから、夢にみるんやな。

和葉。

お前は今、

どこで何してる——？

2・嘘やる？（前書き）

展開が早いかもしれません。大目に見て戴けると助かります。

2・嘘やる？

キンコーン…

「おつす服部！なんや、眠そうやな」

「そーか？まあ多分疲れてるんやろ」

「体力馬鹿の服部も、疲れる事があるんやなー」

「じゃかしいわ！」

そんな会話をしているうちに、担任が入ってきた。

「席つけー！急な話なんやけど、今日は転校生がおるんや」

教室内がざわつく。

けど俺は和葉の事で頭がいっぱいで、ぼんやり窓の外眺めとった。

ガラッ

おおーっ！とか可愛いーとかって歓声が聞こえる。やかましなーっ
て思っと思った俺の耳に、ありえへん言葉が聞こえてきよったんや。

「遠山和葉います。よろしゅー頼んますー」

え…？

「席は…服部の隣がいとな。服部、手え上げい。遠山、あそこや」

呆然としとる俺の隣に、遠山和葉が座った。

「よろしくな、服部君」

服部君…？

コイツ、覚えてへんのか？あんだけ泣きわめいて別れたんに、もう忘れてしもたんか…？

「服部君…？」

「お、おう。よろしゅー頼むわ」

返事をしない俺に心配そうに声をかけてきた『遠山和葉』に、とりあえず適当な返事をした。

3・おとな

なんやねん。

なんやねん。なんやねん。なんやねん！

俺は今、部活が終わって帰路についとる。
昼間のことを思い出してイライラしながら。

アイツ、なんで覚えてへんねん。
『どっかで会わなかったか？』
て、勇気だして聞いたったんに。

『人違いやと思うよ』

軽くあしらいおって。

しかも他の男共に呼ばれていって、にこにこしてる。女共に呼ばれ

ても、にこにこしてる。

本気で、俺の事、忘れとるんやろか…。

ガラッ

「帰ったでー」

ただいまの声をかけて、台所兼リビングの所へ向かう。

「オカン、めし…」

「おかえり平次！」

へ…？

目の前におったんは、さっきまで俺の頭んなかにおった女や。

「なに目エ見開いとんの？久しぶりに会ったんやん。喜んでえな」

「か、かずは…？」

「そつやよ？」

和葉や。学校にいた『遠山和葉』やなくて、俺がずっと会いたかった『和葉』や…。

「な、なんでおんねん！？大体、俺の事忘れたん違うんか！？学校で知らんフリしよったやろ！」

「お父ちゃんまた、今度こっちに転勤になつてん。それで戻つてきたんよ。」

「肝心なところ答えてへんやん」

「あ、ああ。学校でのアレ？あそこで久しぶりー言つて再会したら、アタシ転校早々大騒ぎしそうやってんもん。さすがにそれ、まずいやん？せやから、知らないフリしてみたん」

「おまえな。人の気も知らんと、このボケ！！」

「んー」

「いらん心配せんと、暴れたらよかつたやろ！」

「せやね」

…あれ？

なんか変や。

違和感バリバリや。

コイツ…

なんで言い返してきいへんねん？

そしたらオカンが口はさんできよった。

「ほんま和葉ちゃん大人っぽくなって。べっぴんさんやし。平次の駄々に付き合わんくてエエからね？」

「相変わらずオバチャン口が上手いわあ。」

大人っぽくなった…？

和葉が大人になったんか？

俺ら、また喧嘩しよて約束したやんか！
子供ん時、約束したやろ！

子供？

あの約束は子供の約束。

大人になった和葉には時効、なんか？

なア和葉…

勝手にひとりで、
大人になるなや……

4・本性

「平次く！お風呂あいたで？」

とんとんと、和葉が階段を上ってくる音がする。

結局あのあと、遠山家が帰ってきたお祝いゆーて、親父たちは飲みだして宴会になった。多分親父たちはつぶれてリビングで寝とるやろ。

「平次く？」

「おお。おんで」

ガチャ

和葉が、俺の部屋の扉を開けた。

「うわあ 平次の部屋やあ！めっちゃ久しぶりー！」

「そらそうやるー」

「アタシが引っ越したんが小5の時やから…5年ぶりや!」

「もうそんななるんやな」

俺は適当に話を合わせた。俺の頭ん中はさっきの和葉ことではいっばいやった。

そんで、ある事に気づいたんや…。

「なあ、平次?アタシ、ちょっと大人っぽくなったと思わん?」

「いきなり何言い出すねん」

「なんとなくや。で、どうなん?」

「ん〜。じゃじゃ馬和葉のまんまやろ。」

俺には、和葉のこめかみがピキってなったよーに見えた。やっぱりや。

俺は和葉にわからん程度に笑みを浮かべた。

「…そんな事、ないやろ？もつとよく考えてえな」

「どこをどう見たってじゃじゃ馬やろ。」

和葉の笑顔がひきつった気がした。

俺の思ったとおり、俺がけなせばけなす程、怒りを隠すみたいに満面の笑みになってく。

もう一押しやな。

「あ、アタシ、中学んときしょっちゅう告白されとったんよ？」

「ほー。お前のガッコは物好きが多いんやなー。和葉を相手にするなん、エエ度胸しとるわ」

「なっなんやてえ！？もういつぺん言ってみ！！」

「おー言つたるわ。お前の周りは物好きがぎょーさんいてるんやなあ。ひどいじゃじゃ馬なんに」

「だれがじゃじゃ馬やて？口閉じさせたらか、このドアホ！！」

平次はフツと笑った。

「やっと本性だしよつたな、和葉？」

和葉は、しまった、という風に口に手を当てている。

「平次アンタ…アタシの事ハメたやる！」

「ああ、ハメたった。和葉が和葉ちゃうみたいなんが、嫌やったんや」

「……いつから気づいたん？アタシが大人しゅうなったフリしとった事…」

「いつやろ？はつきりせえへんけど、和葉みてたらだんだん違和感

でてきてな。俺が喧嘩ふっかけた後、妙に口数が減るやろ？あれ、怒るん我慢してるんとちゃうかて、思たんや」

「さすがやな。そういえば今、高校生探偵なんやったね。せやけど…折角大人っぽくなつて平次驚かしたる思たんに、台なしやわ」

「あーほ！度肝ぬかれたわ！喧嘩しよ言つた約束、反古にされた思たんしな」

「…約束、覚えとつたん？」

「当たり前や。あんだけ喚き散らされたら、忘れようにも忘れられへんわ」

「喚き散らすてなんやの！？」

「そのまんまやボーケ」

「ボケちゃうもん！！」

「…くっ」

「…ははっ」

「「あはははは…！」」

「やっぱりこうでないと調子狂うわ」

「ほんまやね」

「もう、変な小細工すんなや？」

「平次の前ではな」

「…は？」

「ガッコでは、大人っぽい子であるねん。ガキっぽいんわ、卒業や！」

「作ったキャラは長続きせんで？」

「ええの！せやから、よろしくな？服部君」

（よろしくやと？邪魔したるに決まっとるやんか！覚悟しときい！）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3629i/>

やくそく

2010年10月11日20時53分発行